

収集現場の映像とその資料的価値

横須賀市自然・人文博物館 瀬川 渉

民俗資料の収集

歴史系の博物館には、多くの場合、考古学・文献史学・民俗学の各分野の学芸員がいます。今回お伝えするのは、民俗学担当の学芸員が扱う「民俗資料」の収集についてです。そもそも民俗資料とは、人の生活を伝えるモノ・コトで、農具・漁具・職人・商人道具、生活道具、祭礼・信仰道具、家屋、年中行事、民俗芸能、家制度、伝説などがあります。道具類であれば寄贈を受け、祭礼や年中行事であれば聞き書きや撮影をして、資料を収集するのが民俗学担当学芸員の仕事です。それでは、どのようなきっかけで資料収集が行われるのでしょうか。祭礼や年中行事の場合は、事前に情報収集をして現場に向かいます。一方、個人・団体の所有物である道具類を収集（寄贈を受ける）する場合は、所有者から「うちにこんなモノがあるのだけど、博物館で必要だったらどうですか？」という趣旨の電話がきっかけとなることが多いのです。そして実際にお宅に訪問し、実物を拝見します。その際、資料としての価値はもちろん、収蔵庫のスペースや運搬方法も考慮して、受け入れるかどうかを判断します。

漁労用具の収集とその映像

横須賀市佐島には、当館の附属施設である天神島臨海自然教育園があります。自然教育園ですので、歴史系学芸員の仕事には直接関係ないと思われるかもしれませんが、そうではありません。長年、地域との関係を築いて活動をしていれば、地元の漁師さんと話す機会に恵まれるのです。学芸員が常駐している施設ではありませんが、附属施設の職員を通して呼びがかかることも少なくありません。今回ご紹介するのは、佐島の漁師さんからいただいた漁労用具（漁の道具）とそれを収集した際の映像についてです。

佐島の漁師・孫次郎（屋号）さんは、当時70代後半で、兄弟と一緒に5トン船で漁をしていました。「自分も兄弟も歳を取ったので、船を手放そうと思っている」とのことで、資料寄贈のお申

し出がありました。孫次郎さんには何度か昔の佐島や漁の話聞いていましたので、道具の資料的な価値も十分把握していました。あとは、どのくらいの量があるかが問題です。孫次郎さんは一本釣漁も延縄¹も突きん棒漁²もしていたので、相当な分量になることが想像できます。また組合から借りている小屋を引き払う期限に間に合わせなければなりません。ゆっくりと、ひとつひとつの道具について説明を受ける時間がないことに気づき、ビデオカメラで撮影しながら収集することを思いつきました。幸いにも当館には備品としてビデオカメラが導入されたばかりでしたので、それを活用することができたのです。あとは孫次郎さんが撮影に同意していただくことと、うまく撮影できるかが問題です。孫次郎さんの同意は、具体的な収集日時を決める際に得ることができました。残るは上手に撮影することだけです。この場合、「上手に」というのはどのようなことでしょうか。まずはその検討から始めました。そもそも、限られた時間の中で丁寧な聞き書きをすることができないと思ったから撮影を思いついたわけなので、音声がいまいちと録れていなければなりません。そのため、三脚を使用して少し離れた位置から収集の様子を撮影するのでは、音声聞き取れない恐れがあるため、ビデオカメラを手で持ちながら撮影することにしました。当然ですが手持ち撮影は、手ブレを起こしやすいので注意が必要です。脇に500mlのペットボトルなどを挟みながら撮影すると手振れが軽減されます。そして、最も注意しなければならないと思ったのは、ビデオカメラのモニターを見ながらではなく、相手の顔を見ながらお話を聞かなくてはならないということです。なぜならば、私がビデオカメラのモニターを見ながらお話を聞くのでは孫次郎さんに失礼ですし、話も弾まないからです。民俗学担当の学芸員にとって、話が弾まなかったり、相手に不快な思いをさせてしまったりしたら仕事にならない、と私は考えています。そのためには、相手の顔を見ながら撮影する技術を身につけなければな

¹ 幹縄とそれに等間隔で付属する枝縄からなる延縄を用いて行う漁法。

² 漁師が船主に立ち、長鉞を用いてカジキなどの大型の魚を捕らえる漁法。

りませんでした。とはいっても、そんなに難しいことではありません。相手の顔を見ながら撮影していると、どうしてもビデオカメラを持つ手が下を向いてしまうので、意識して上に向けてるようにすれば良いのです。そのようなことを注意しながら、孫次郎さんの所へは3回、計6時間程にわたり撮影をしました。孫次郎さんは道具の使い方をその場で見せてくれ、質問にも快く答えてくれました。釣漁、網漁、延縄漁、曳縄漁、突き棒漁などの漁労用具約100点が寄贈され、それぞれの代表的な道具についての説明を撮影することができたのです。

映像の資料的価値

予想した通り、収集現場の映像は大変役に立ちました。館に戻り、映像を何度も見直すことで、詳細な資料カードが作成できました。釣竿といえども、カツオ用のものもあればサバ用のものもあります。また、同じカツオ用の釣竿でも、船首あたりで使用する釣竿と船尾あたりで使用する釣竿では、長さが違います。このようなことを短時間で次々と記録することはほぼ不可能でした。また、孫次郎さんは漁師ですから、当然、漁師言葉で話すので聞き取りにくい場合もありました。資料収集に3回伺いましたから、そのような場合でも前回の映像を見直して疑問点を再質問することもできました。

次に、収集現場の映像はそのまま展示に利用することができました。資料を収集し、整理・登録が済めば、ほとんど資料室で保存するのですが、一部の資料は展示する場合もあります。孫次郎さんから寄贈を受けた資料の一部は、天神島自然教育園のビジターセンター内の展示室に展示することにしました。資料を展示する場合、来館者に対してどのような展示方法をとれば分かりやすい展示となるかを学芸員は考えます。その資料について予備知識がない方に、端的に説明するのは難しいものです。読みやすい文章量やフォントにもしなければなりません。また、他の展示資料との調和も考えなければなりません。様々な視点から展示方法を検討するなかで、文章では説明が難しいことに気が付きました。釣針や擬似餌のようなものであれば良いのですが、漁労用具のなかには「道具をつくる道具」というものもあり、来館者がイメージし難いものです。特に昔気質の漁師

は、自分の手に合った道具や自分ならではの工夫を取り入れた道具を使うことに誇りを持っています。「道具をつくる道具」こそ、漁師の知識と経験が詰まっていて、民俗学が得意とする領域です。そのような道具の一つに、イカツノ（イカ釣針）の「ツノマキ」があります。イカツノとは、鉛製の芯に糸糸を巻きつけた釣具ですが、そのイカツノに糸糸を巻きつける道具がツノマキです。また、イカツノがイカを釣る道具であることはわかっても、具体的な使用方法までは来館者に伝わらない場合があります。そこで思いついたのは、イカツノとツノマキの説明を映像でもお見せすることです。もちろん、孫次郎さんからいただいた道具の中にはイカツノがあり、イカツノを海へ投げ入れる様子も実演していただいていた。そこには、イカツノの投げ入れ方からイカを吊り上げる際の工夫まで、孫次郎さんが語っている姿がありました。撮影時は特に気にしていませんでしたが、映像の中には漁師の知識や経験が語られていたのです。ツノマキについても孫次郎さんは説明をしてくださっていましたが、実際に使用している映像はありませんでした。そこで、孫次郎さんからの寄贈から数か月後に、同世代の漁師さんからツノマキ単体の寄贈のお申し出をいただきました。ちょうど孫次郎さんの映像を展示しようと考えていたころでした。イカツノの使い方の映像だけ展示しても良かったのですが、やはり「道具をつくる道具」も大事ですのでツノマキの撮影を待つことにしました。映像展示にはデジタルフォトフレームを使用し、約12分の映像に編集しました。編集業者に頼めばテレビ番組と変わらないクオリティのものができますが、10分程度の映像だとしても高額になってしまい、往々にして博物館にはそのような予算がつかないのが現状です。また、プロが編集・加工すれば見やすい映像になるのですが、撮影したままの映像を流した方



イカツノとツノマキ

が臨場感を得られるのではないかともしました。



館内の映像展示

編集・加工しない映像は冗長になりがちで見えにくいかもしれませんが、その場の雰囲気や相手の声色も伝わるものです。予算があまりないことへの言い訳ではありませんが、当初は来館者にその空気感が伝われば良いと考えていたのは先述のとおりです。しかしそれは、来館者に対してだけではないことに気が付きました。博物館の資料がずっと保存され展示されますが、私たち学芸員には定年退職等があり、必ずその博物館を去る日がやってきます。当然、学芸員はそのために引き継ぎ（前任者から後任者へのメモなど）の準備をしますし、日ごろの資料登録・整理や調査研究といった本来業務もそれ自体が引き継ぎ資料といえます。それらは整理された情報として、簡潔にわかりやすく記述されています。後任の学芸員が参照しやすいものであり、地域博物館の学芸員として何とか仕事をスタートさせなければならないときに大変役に立つものです。しかし、資料収集時のやり取りや雰囲気までは伝えることができません。他の分野よりもそれが重要である民俗学に

としては、残念なことだと思います。もちろん、それでも支障なく学芸業務ができますし、多くの博物館で従来通りの方法による引き継ぎが問題なくなされてきました。今回、私が撮影した孫次郎さんはじめ漁師さんから漁撈用具を収集した映像は、その残念な思いを多少なりとも減らすことができると思っています。また、収集時にメモを取れなかった部分も拾い上げますし、前任者と後任者で、資料に対する視点が異なる場合があります。簡潔にまとめられた資料カードや調査報告よりも、収集現場での臨場感を味わえる映像があったほうが、後任者の視点から寄贈者の発言を分析できます。

おわりに

数ある民俗資料のなかで、有形の漁労用具の収集を題材に、その収集現場の映像について述べてきました。単に備忘録として収集時の映像を撮影していたものが、展示にも利用でき、さらには後任者への引き継ぎ資料としても有用であることがわかりました。現在、当館では映像展示の充実に努めています。そこには資料収集の様子だけでなく、数十年前に横須賀市が制作した郷土紹介番組も含まれています。映像展示、特に収集現場の映像を撮影・展示するには、寄贈者の了承が必要です。その了承が得られるだけの関係を地域と築くことも重要な仕事であることも最後に申し添えなければなりません。また、今後の課題として、館内での展示にとどまらず、インターネット上での公開やアーカイブス化なども検討する必要があります。